

に対して、化学療法に加え、照射療法・計 70Gy を行なうことによって、完全寛解に至った2症例を経験した。

この2症例に共通したこととして、①腺癌である。②縦隔進展を認める。③遠隔転移を認めない。④CEA 高値である。⑤放射線治療が有効とおもわれる。といった5項目があげられた。特に CEA に関しては、2症例において治療前にはそれぞれ、278ng/ml, 3177.2ng/ml と著明高値であったが、照射6カ月後には、ともに、5.1 ng/ml, 5.9ng/ml と正常域に入り、その後も上昇を認めていない。以上のごとく、共通した上記5項目をもった肺癌があるのではないかとおもわれた。

#### 6) 末梢神経障害が先行した肺小細胞癌症例の検討

○宮尾 浩美・水沢 彰郎  
佐藤 和弘・野沢 悟  
嶋津 芳典・田辺 肇  
中島 喜章・永井 明彦 (新潟大学)  
来生 哲・荒川 正昭 (第二内科)  
斉藤 豊・原山 尋実  
湯浅 龍彦・宮武 正 (同神経内科)

最近当科で経験した remote effect によると思われる末梢神経障害が先行した肺小細胞癌3例について報告した。

3症例の組織亜型は、いずれも oat cell type で、Stage はⅢおよびⅣであった。各々先行期間は、11カ月、4カ月、2カ月であった。1例目は感覚性 neuropathy が主であり、2例目は感覚・運動 neuropathy が認められた。3例目は検索不可能だった。また1例目のみ antineuronal antibody は、陽性であった。化学療法施行により、3例とも胸部レ線に改善認められたが、神経症状は不変であった。

本症の早期発見と原疾患に対する早期治療が必要と思われる。

#### 7) 非小細胞肺癌に対する High dose-CDDP 療法の pilot study

○横山 晶・木滑 孝一 (新潟県立がんセンター新潟病院内科)  
栗田 雄三

1989年2月より High-dose CDDP 療法の pilot study を開始したので報告する。High-dose CDDP 療法は、CDDP 80mg/m<sup>2</sup> (i.v.) を3%食塩水 250ml に溶解し、3時間で day 1, 8 に点滴静注し、VDS は 3mg/m<sup>2</sup> を day 1, 8 に静注した。以上を1コースとし以後4週毎に繰り返した。また CDDP の血中濃度を測定し、Pharmacokinetics を解析した。登録症例は6例で、全

例が評価可能であり、組織型は肺腺癌2例、肺扁平上皮癌2例、その他2例であった。治療成績は、CDDP 単独投与の2例は NC で、CDDP+VDS の4例はいずれも PR であった。いずれも寛解持続中で、生存中である。副作用は、VDS 併用例で白血球減少が著明であったが、腎毒性は認められなかった。軽度の難聴を2例に認めた。非小細胞癌に対する High-dose CDDP 療法は3%の高張食塩水を併用すること、投与量を day 1, day 8 に分割することで、腎障害を防止でき、その他重篤な副作用も認められず、奏効率は VDS を併用することで、向上することが期待された。

#### 8) 左房合併切除を行った肺癌症例の検討

大和 靖・広野 達彦  
小池 輝明・滝沢 恒世  
相馬 孝博・吉谷 克雄  
中山 健司・土田 正則 (新潟大学)  
江口 昭治 (第二外科)

教室で経験した左房合併切除肺癌4例を検討した。全例60才台の男性で、下葉原発の扁平上皮癌であった。術式は肺摘除が3例、胸膜肺全摘除が1例であった。左房合併切除の方法は、鉗子下切除が3例、体外循環下切除が1例であった。体外循環下切除の1例は、欠損部をパッチ補填した。術後 TNM 分類は、T4N0M1 (肝転移) が1例、T4N2M0 が3例であった。根治度は、M1 症例が絶対的非治癒切除であったが、他の3例は相対的治癒切除が得られた。転帰は、3例が術後5カ月以内に死亡したが、1例は3年5カ月の現在、再発なく健在である。以上左房浸潤肺癌に対しても積極的な外科治療を行うことにより、長期生存も期待できるものと思われる。

#### 9) 末梢部発生扁平上皮癌の臨床病理学的検討

渡辺 恒・金井 至  
本間 慶一・大西 義久 (新潟大学第二病理)  
江村 巖 (新潟大学附属病院)  
病理部

〔目的〕：末梢発生肺癌に腺癌が多い事は衆知の事実だが線維化、胸膜陥入を伴う扁平上皮癌も稀でない。今回、末梢発生扁平上皮癌を臨床病理学的に検討したので報告する。

〔対象と方法〕：過去5年間に切除された肺癌症例は279例あり、このうち32例の末梢発生扁平上皮癌を検討した。

〔結果〕：腫瘍分化度では低分化癌の比率が高く、また肉眼的特徴として胸膜陥入は53.1%、空洞形成は50%、線維化は56.3%に認められた。末梢発生腺癌に比して